

## なぜ中東はわかりづらいのか・1

### —体験的異文化論—

2025.12.04.

位野花 靖雄

中東地域で日々起こっている出来事は複雑怪奇で、良くわからないと感じておられる方が多いと思います。何故なのでしょうか？

いろいろな切口からのアプローチがあると思いますが、中東での体験をベースに、風俗・習慣・しきたりなどの民俗学的分野から考えてみました。

#### 農耕と遊牧

私たち日本人のルーツは、梅雨・台風・豪雪など季節の変化をひたすらに受け止め、狭く限られた田畠を耕し、生まれた土地から離れることなく生活してきた農耕民族です。

一方、中東アラブの人々は家畜を追い、水・牧草を求めながら一か所にとどまることなく移動し、厳しい自然環境に対応してきた遊牧民族です。



即ち、私たちと中東の人々は、180度相対する生活・文化圏にあるといえましょう。



：原資料・片倉もとこ「アラビアンノート」

#### 地縁と血縁

農耕民族の私たち先祖は、生まれ育った土地から離れることがない生活を送ってきました。土地の人々と波風を立てず、「お隣さんさえ良ければ・・」・「出る釘は打たれる」など、ひたすらに自分を押し殺し、地縁を大切に過ごしてきました。脱藩は死罪にもなりました。

このように土地との結びつきを大切にする流れは、現代においても県人会とか、国体・高校野球・大相撲・全国都道府県対抗駅伝など様々な場面で見られます。

2023年、WBCで日本が優勝し最優秀選手に大谷翔平が選ばれた時にも、出身の地元奥州市では市役所に人々が集まり、地元の名誉として町を上げて祝福した光景が記憶に新しいところです。2024年パリ・オリンピックで、やり投げで北口選手が金メダルを手に入れると、出身の旭川市では全市を挙げて盛大な凱旋パレードが行われました。



一方、中東の人々は予測できない厳しい自然環境が待っている荒野に乗り出し、水・牧草を求め日々転々とする遊牧生活を送ってきたため、出身地への執着は希薄です。荒野に踏み出し、どのルートをとるかは生死にかかわる問題であり、他人に任すわけにはいきません。自己判断・自己責任です。そこには、他人の顔色をうかがうとか、気配りをしている余地はありません。

そのような中で頼れるのは血縁です。アラブには「兄弟に味方せよ。たとえ彼が被害者でも加害者でも」とのことわざがあります。どこに移動しても変わることがないのが、血縁です。アラブのメンタリティの中核ともいえるでしょう。

### 男は黙って…

我々日本人はまわりに配慮・気配りし、時には自分を犠牲にしても、つつがなく全体をまとめようとする傾向があります。コロナ禍でもマスク着用しない人に対し、「皆と違うことをやる人は許せない」との同調圧力も話題になりました。

一方、アラブの人々は全く逆で、何事においても自分の考え方を前面に押し通そうとする傾向があります。日本人から見ると、中東の人々は自己主張が強く、相手への配慮に欠けると感じるかもしれません、前述したように生きるか死ぬかの判断を常に求められてきた人々のDNAには、自己主張するのは当然の行動として組み込まれているでしょう。

アラブ世界には、「沈黙は銀、雄弁は金」との諺があります。一方、日本では「沈黙は金」との諺があります。

### 小異と大同

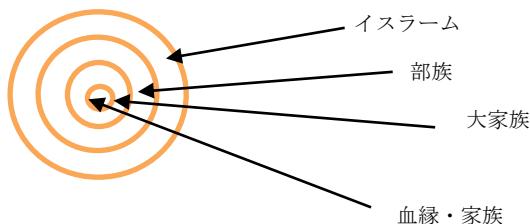
アラビアのロレンスが“ベドインは砂漠の砂のようで、しっかり握っておかないと指の

間から落ちてバラバラになる“と嘆いたと伝えられていますが、ロレンスが本当に言ったかどうかは別にして、アラブの人々は個人としての主張が強いため、全体としてまとまることが苦手であるといえましょう。

国を揺るがすような問題が起こった場合、どうすべきかとの議論に直面した時、違いが顕在化します。日本人の場合には、「小異を残し大同につく」とのことわざでのように、自分の考え・利益を犠牲にしても、大局的に纏め上げようとする傾向があると思います。

一方中東の人々は全体よりも個を重視する意識思考があり、「個」が最優先する結果、国を揺るがす問題が起こっても、判断基準がチジミ模様的に大部族→部族→大家族→家族と収斂し、国旗の下に一致団結し大局の方針を打ち出せない傾向があります。

— アラブ人の価値判断基準 —



### ペドクラシー

中東は遊牧生活様式であると同時に、部族（ペドイン）型社会集団様式でもあります。部族では長老以外は全員平等です。デモクラシーを文字って「ペドクラシー」とも表現されています。

すなわち、中東の人々には誰でもチャンスがあれば指導者・為政者になれる機会があるとの意識が底流にあり、このことが政情不安を招いている一因との指摘もあります。また、イスラームでは神の前にすべての人は平等としていますが、このことも政情不安定の背景にあると考える中東専門家もいます。イスラームについては、紙幅の関係もありデリケートな問題でもありますので、別途考えてみたいと思います。

以上述べてきたように、私たちと中東の人々とは生活・文化面で正反対の立ち位置にあり、この様なことが私たちに中東との距離感を生じさせ、わかりづらくさせている一つの要因なのではないかと思われます。

次回 別の観点から本題を考えてみたいと思います。

